

支え合いマップづくりとは？

住民のふれあいや助け合いの実態を、地元の人から聞き取り、住宅地図に記入していくことです。地域にどんな福祉課題があり、住民はどう対処しているかが見えてきます。その結果をもとに、その地域でどんなことに取り組んだらいいのかを考えるのです。

■「福祉マップ」と「支え合いマップ」の違いは？

「福祉マップ」は、要援護者を地図に乗せるだけ。「支え合いマップ」は要援護者に周囲の誰がどのように関わっているかも調べます。住民の暮らしにくさの原因も、その問題に対し住民がどんな解決努力をしているかも見えてきます。それを生かすことで効率的に福祉のまちを作ることができるのです。

■地図の人名と位置で思い出す

住民のふれあいや助け合いは、水面下での営みなので、表面では見えません。住民が集まって、AさんはBさんが見守っている、Cさんの困り事にはDさんが関わっていると情報を出し合い、それを地図に集約することで見えてきます。地図の人名と位置関係を見ると、「そう言えばAさんちでBさんの姿を見かけた」など思い出すのです。

■目的は取り組み課題の抽出

「取り組み課題」とは、「問題」と「解決策」を合わせたもの。課題が出てくるには住民が抱えている問題を打ち明ける必要があります。それができる環境をどうつくるかが課題です。



(4)なぜマップづくりが必要なの？

- ①地域を漠然と眺めても、人の関わり合いは見えない。
- ②地図上の人名と位置関係で、それが見えてくる。
- ③関わり合いの線の少ない人が「気になる人」。

(5)取り組み課題が出てくるには？

- ①マップづくりをする人の一番の悩みは「取り組み課題」が出てこないこと。
- ②当事者の現状に満足しては課題は出てこない。
- ③要援護者でも、もっと豊かに生きられるべきだと目標を高くすれば出てくる。

(4) 住宅地図に記入して取り組み課題を抽出すること。

福祉のまちづくりのために、住民の支え合いの実態を

(1)福祉のまちづくりとは？

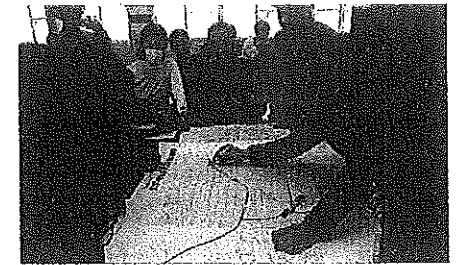
- ①要援護者になっても
- ②住み慣れた家や地域で
- ③安全かつ心豊かに生きられるよう
- ④住民と関係機関が協力すること。

(2)なぜ支え合いを調べるの？

- ①要援護者が地域で生きるために、支え合いは不可欠。
- ②公的サービスの充実で支え合いが低調になった。
- ③そこで支え合いを盛んにすることが福祉のまちづくりの重要なテーマに。

(3)どんなことを調べるの？

- ①要援護者がどこに？
- ②どんな問題を抱えている？
- ③だれが関わっている？
- ④その他、福祉のまちづくりの課題は？



■要介護でも豊かな生活ができるように

- ①要援護者になっても、とは「要介護3や4になっても」。
- ②できるかぎり施設でなく自宅で生きていけるようにする。
- ③要介護でもふれあいや趣味が楽しめること。
- ④そのためには、公的サービスと住民の助け合いが連携し、隙間を作らぬようにする必要があります。

■「まちづくり」より「ご近所づくり」を

人々は平均50世帯でふれあい、助け合っています。ここを「ご近所」と名付けました。支え合いマップはこのおよそ50世帯ごとにつくるのですが、そこで出てきた課題がそのまま「ご近所福祉」をすすめるための取り組み課題になるのです。

■公的サービスが充実して助け合いが低調に

介護保険制度が始まってから、人々はこぞってサービスを利用するようになりました。お隣さんに頼まなくなったのです。頼まれる方も、「サービスを利用したら？」と言います。こうやって住民の支え合いが段々行われなくなりました。要介護の人が地域で安全に、また生きがいをもって暮らすには、周りの人が見守ったり、仲間入りさせてあげねばならないのです。

■要援護者探しだけでなく誰が関わっているかも

要援護者がどこにいるかだけでなく、だれがその人を見守ったり、困り事を解決してあげているのかも、同時に調べます。その地域（ご近所）が住みにくくなっている問題をつきとめるとともに、住民がどのように解決努力をしているのかも調べます。当事者や住民の解決努力を生かして、彼らに納得できる解決策、彼らにも取り組めそうな解決策を考え出すのです。

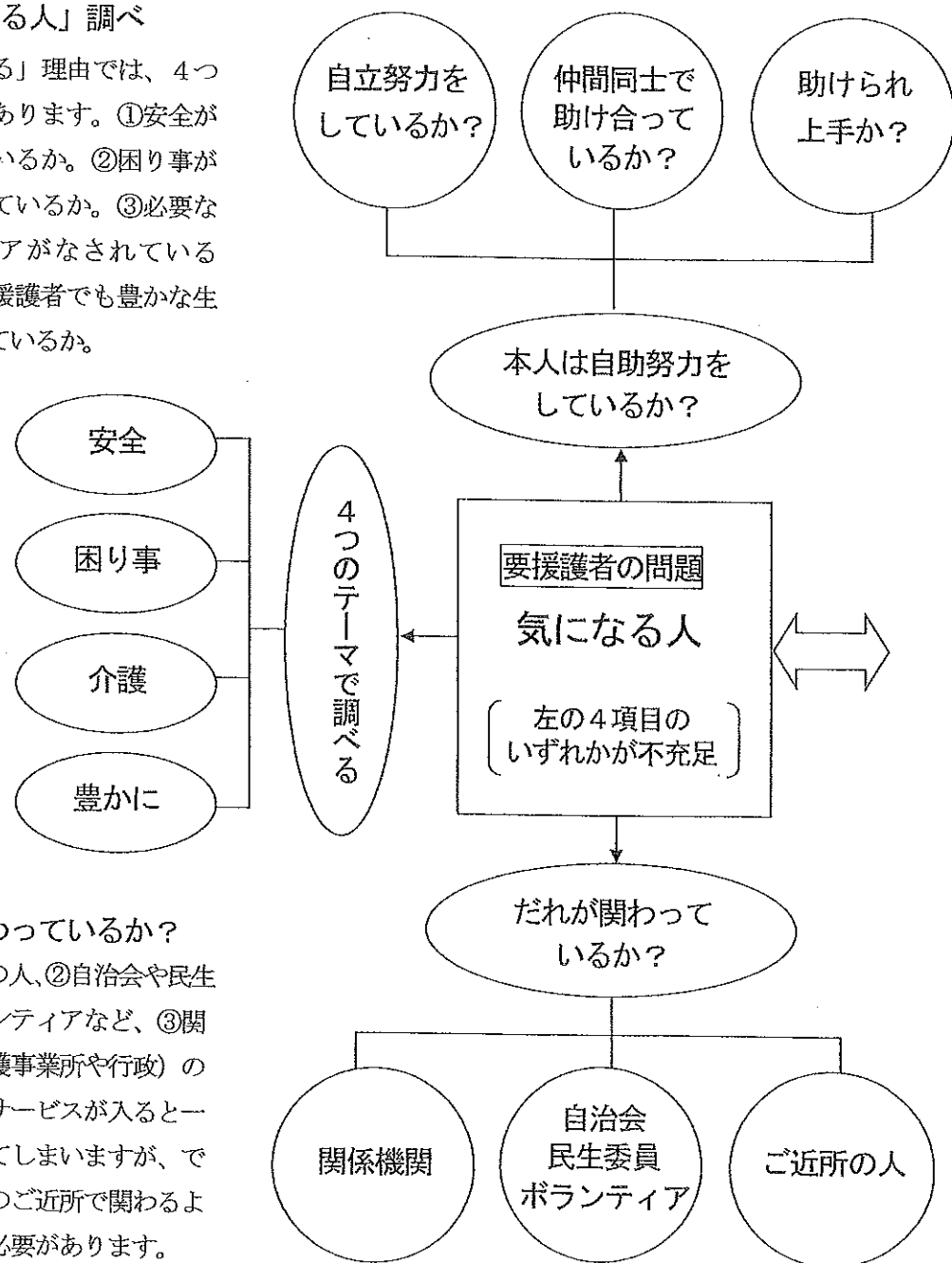
どんなことを調べるの？

大きく分けると「気になる人」と「気になること」。前者は要援護者で、住民が気になっている人。後者は住民が住みづらさを感じている問題を取り上げます。

「気になる人」では、その要援護者にだれが関わっているのか、またその要援護者自身が自分の安全確保や問題解決のためにどんな努力をしているか（自助努力）を調べます。

■「気になる人」調べ

「気になる」理由では、4つの課題があります。①安全が守られているか。②困り事が解決されているか。③必要な介護やケアがなされているか。④要援護者でも豊かな生活ができていますか。



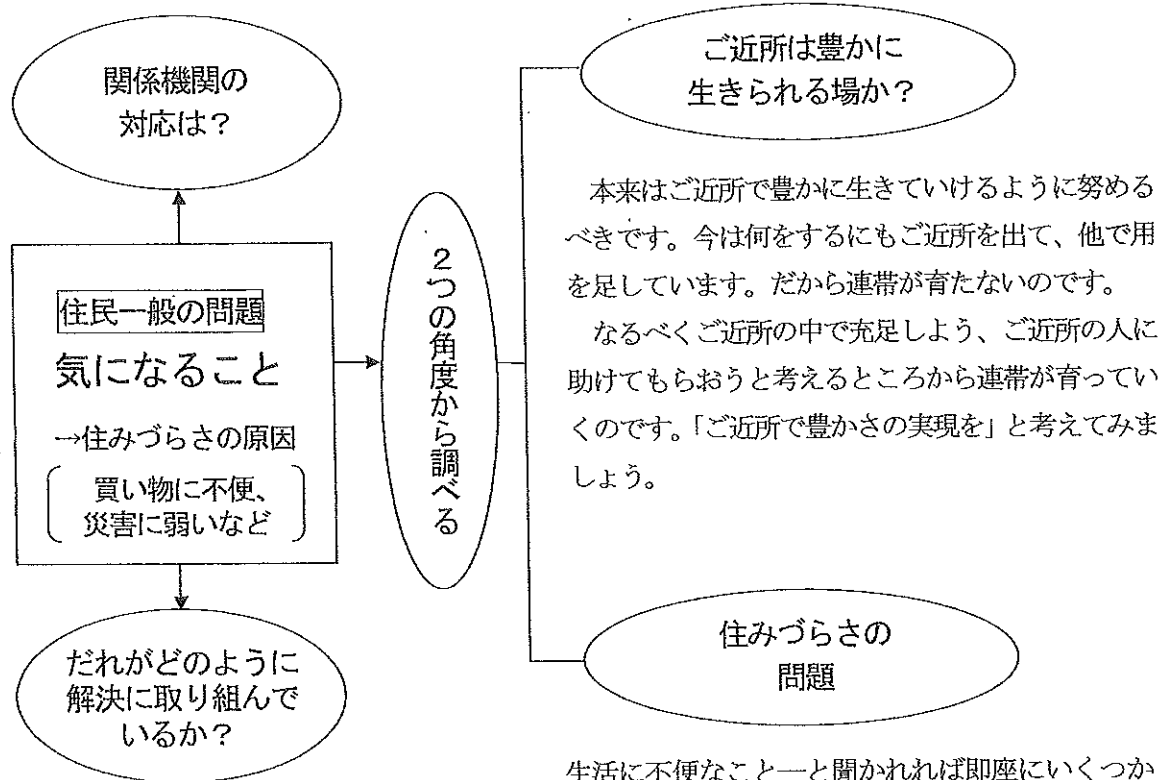
■誰が関わっているか？

①ご近所の人、②自治会や民生委員、ボランティアなど、③関係機関（介護事業所や行政）の3者。③のサービスが入ると一件落着と見てしまいがちですが、できるだけ①のご近所で関わるよう仕向ける必要があります。

■「気になること」調べ

「気になる」理由は2つあります。1つは、実際に住みづらい原因が存在する場合（買い物に不便など）。もう1つは、ご近所で住民は豊かに生きているかです。

「気になること」では、まずその問題に、住民のだれがどのような解決努力をしているかを調べます。一方で関係機関はどのように動いているかも調べます。



■誰がどのように取り組んでいるか？

おもしろいもので、地域で問題が生じると、それを解決するための行動をだれかが取り始めます。新旧住民の交流が不足していると、両者が入り混じってのパーティやガレージセールを開くとか。

こうした、ご近所で実際に実践されている解決行動を上手に生かして本格的な企画を立てるようにすれば、うまくいくはずですよ。

マップづくりは「ご近所福祉」をめざす

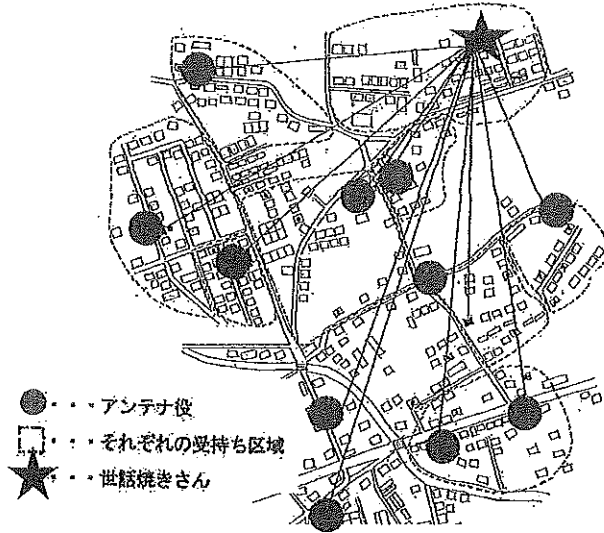
マップづくりは約50世帯の「ご近所」ごとに実施します。この範囲でないとお互いが見えないのです。ところがこの「ご近所」は、マップづくりだけでなく、住民が助け合うのにも最適の圏域だと分かってきました。

■自治区圏域も広すぎてお互いが見えない

地域では、①市町村に、または②校区にも社会福祉協議会が置かれています。熱心なところでは③自治会ごとに福祉をすすめています。しかし住民は、自治区圏域（数百世帯）でも助け合うには広すぎると言います。平均50世帯のご近所ならお互いが見えるし、助け合いも容易だと言うのです。

■マップで「ご近所福祉」の取組み課題を抽出

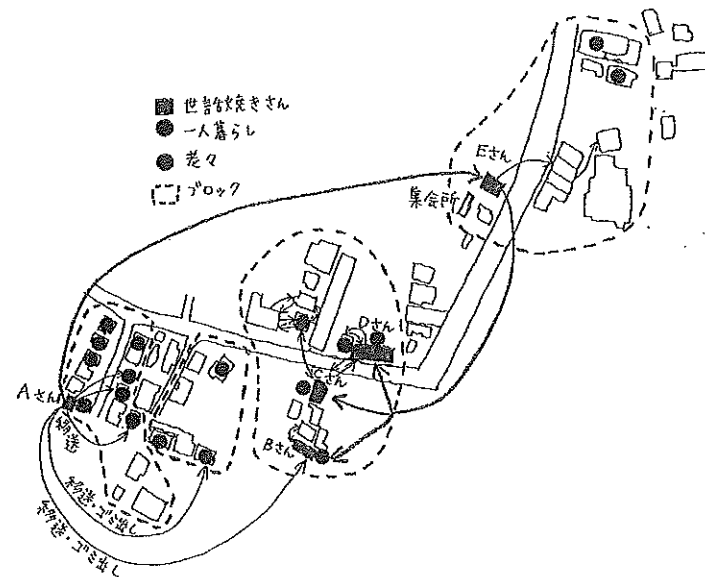
「ご近所福祉」は主に「ご近所」内の有志（世話焼き等）ですすめればよいことで、自治会や地区社協などは、その後方支援役を引き受ければよいのです。だからマップづくりとは住民主体で「ご近所福祉」をすすめるための「取組み課題」を抽出することとなります。



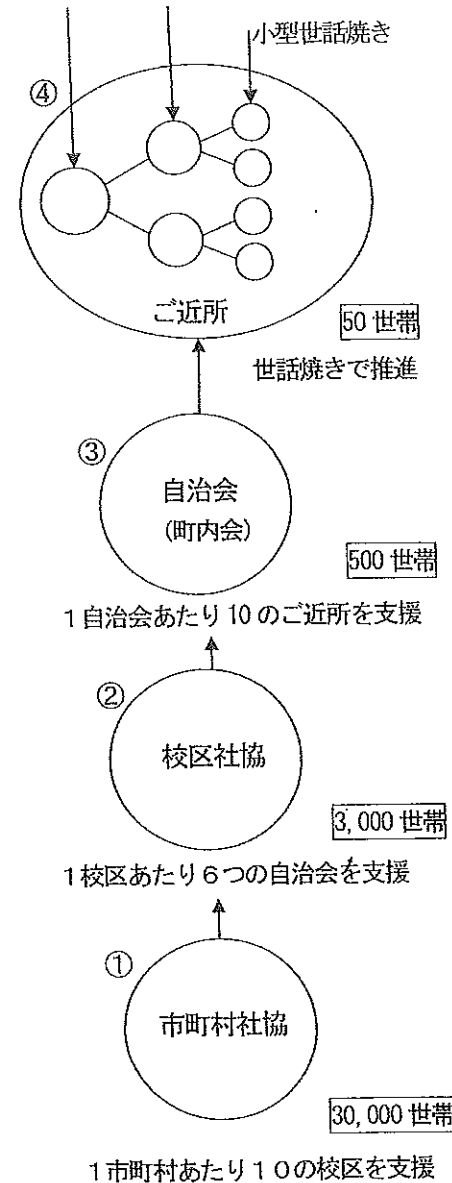
この地区（数百世帯）を仕切っている女性がいました。しかし彼女が把握しているのは足元の50世帯だけで、その他の地区は「ご近所」ごとに世話焼きを見つけて、その人から情報をもらっていました。

■大中の世話焼きが仕切っていた

左のマップを丁寧にみると、4つの小ご近所に分かれており、それぞれに中型世話焼きさん（5、6人の面倒を見る）がいます。そしてご近所全体を仕切っているのが左端のAさん（大型世話焼きさん。10人程度の面倒を見る）です。Aさんは毎日、各小ご近所の中型世話焼きさんを訪問して、近況を聞いていました。だから、自治会や民生委員は、定期的にAさんを訪問し、彼が困っている難問への取組みをサポートすればよいのです。



大型世話焼き 中型世話焼き 小型世話焼き



〈注〉ご近所圏域でマップ作りをする際に、①②③のスタッフも参加し、出てきた取組み課題の中の、各自自分たちの担うべき部分を引き取って帰る。

■ご近所福祉活動のメリットは？

- ①人々の困り事が見えやすいし、わずか50世帯だから困り事の数も少ない。
- ②問題がまだ小さく、芽のうちに解決できる。
- ③それだけ住民個々の負担が少ない。
- ④世話焼きさんなら容易に解決できる。
- ⑤足元に人材がいるから、緊急事態にも即応できる。

■ご近所福祉は住民流で

「ご近所」という小さな圏域で福祉をすすめるには、住民独特の助け合いのあり方に従う必要があります。「住民流」というものがあるのです。①住民にとって「地域」とは「ご近所」のことである。

- ②そこでは天性の資質を備えた世話焼きさんが中心になって活動している。「ご近所福祉」の人材は、「教育」「養成」をするだけでは機能できない。
- ③ご近所では問題を抱える当事者が、助けてほしい相手を選ぶもの。勝手にボランティアを派遣しない。
- ④だれが関わってもいいというものではない。相性の合う者同士が関わり合うもの。
- ⑤「ただ一方的に助けてもらうのは困る。私もお返しをしたい」。ご近所は双方向である。
- ⑥意図的な「サービス」や「ボランティア活動」はダメ。生活の中で、その接点でさりげなく関わるもの。
- ⑦活動者は要援護者を分類し、まとめて関わろうとするが、地域では一対一の関係が大切。大人数の会食会よりも、お茶飲みやおすそわけの方が喜ばれる。
- ⑧ただ安全を守ったり、困り事を解決してあげるだけでなく、「豊かな生活がしたい」という願いに応える必要がある。